

東遊雜記卷之拾七

六三八二

明治十三年癸亥

備中古河原著

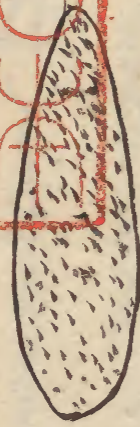
蝦夷地ヨリ出夫ノ根石ノ道

蝦夷地ヨリ出夫ノ根石ノ道

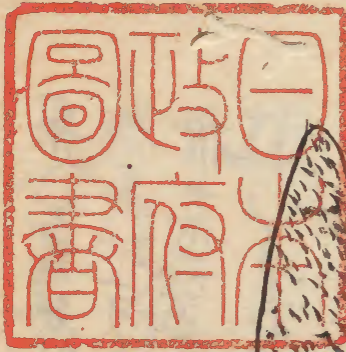
大小有



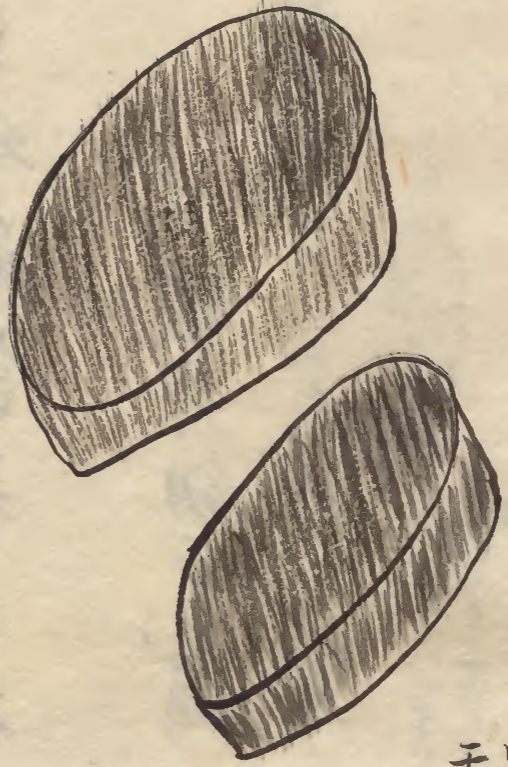
長升大凡ハニ寸余小凡ハ寸余
日本ヨリ出ん夫ノ根石トハ形
異ハ凡ハカニ赤ク
ラヒタル上高ノ石也



見ル所石英ニ似テ白ク又赤ク色ヲ帯
キ所モラリテトカニ所ハ方ニ出
水晶トハ異ハニテ光ルト古
ラス如此トカリテアリ蝦夷地産
ニテテ珍ニキ石也



是ハ自然石ニテ上ノ国浦ノ東方ヨリ
 穀夷地ヲリト云出所不祥奇石ニテ
 稚ナルモノナリ



辣臭ノ圖
 丸ニテハカリ丸
 大カアリ色白ク
 光リ見事ノ
 モノナリ



八月九日海海の日和よりして出所海をれ前度より
 此石の事より海海海海と云出所不祥奇石ニテ
 ウヤハ前より海海海海と云出所不祥奇石ニテ
 沈み入りて見ると云々又雅夷化之高公
 為小度く沈みき北谷兵右海海海海
 長徳の外ウヤハ前より海海海海と云出所不祥奇石ニテ
 托と尋ずるを記せしもの

新刊の原所に油屋傳兵衛と云人有り
 家ト云茶中才の云云家カクテ石積の

船拾遺司持ししソウヤ海海の交易を
しし業としてにけ船の出入りあり
船美の多しと名ありしニソトクト移り日切あり
船美ししと少しきし一船ありしやうあり
高きしに船美切れし移せしあり古あり
ありしきし巻物物にせし一船ありし
皆し衣服しせし錦半一は長何と云
國より海ししものしき事詳しし船
云に及所ししものしき一船ありし

船の織紋ありし夫人の衣けのりし回にあ
し織紋の形ありしを衣ししと云うる官服あり
しと云う是に依りてありしと云うる衣は
錦ししと云うる製せし衣ありし其の由に
の字ありし珊瑚珠蝙蝠のりし何れし小形を衣
し衣ありし襟袖の仕立ありし念の入りし
し衣ありし國王の官服ありし衣に五匹の形
又田ありし織紋ありし同一衣を衣にせし
船の織紋ありし有王子連衣ありし人の官服あり

山より四乳の乳の乳有て雲形をまき
 有諸彦大夫の衣あふん
 のしりていウヤへ来カロウト信の高美の
 出洲てあふんやウヤへ遠き北方の國
 交易してね名(又まされ
 中より^世ヤウ世錦と制せる國と
 と移る國と知り物語
 今あれた持酒を夷人たに志ふぬ
 されらるれは推考の況とせられはる

阿蘭陀人々中三國(往來して)の
 國にまきまきとて右のめきとて
 今しと物持とてと物れと東鞋靴
 國の内より出る中をそのまきとて
 考へ思ふに北方の國とて大寒國は
 委と初をまのゆしまふありとまき
 及考がまの天地の事理とて序例
 まよめとてとての錦にあて
 今考の織故の細密ありとて今考

日本の錦と返しは表返し見れば金糸
と刺す所の又織はまきかき金
糸の書寫は手くさかにおりぬ之中是か
まきかき錦日本も織られたる表返し
はくさかに金糸を自の糸よそ織はまき
かき表の紋もまきかき金糸の書寫は
まきかきにおりぬ表返しは織られた
て定てまきかき金糸の書寫はまきか
織手まきかきに書寫の如くはまきか

りまきかき糸は織手まきかき金糸の書寫はまきかき
百羊の首まきかき糸は織手まきかき金糸の書寫はまきかき
国より傳へまきかき糸は織手まきかき金糸の書寫はまきかき
羅紗物と持海まきかき糸は織手まきかき金糸の書寫はまきかき
佛の外懐かき糸は織手まきかき金糸の書寫はまきかき
兵上高き糸は織手まきかき金糸の書寫はまきかき
糸は織手まきかき金糸の書寫はまきかき
外の書寫は織手まきかき金糸の書寫はまきかき
糸は織手まきかき金糸の書寫はまきかき

夫竹筒ヲイロイソ下襦

此物ハ何れト雖美の初在に何れ
北方より海より西よりすは同其夜
中更に州の方角同に長計長九十九
三十一福也



同

此竹筒は初に西より海より西よりすは同其夜



此と云う以て西より海より西よりすは同其夜

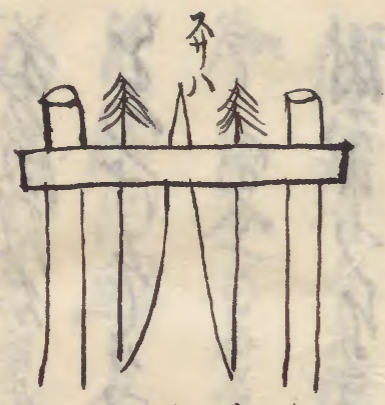
長三尺六寸五分

衣履と隨ら富饒の夷人ありて之と衣履と類
のや古衣と雖も其北方より海より襦と云

かき夷人の居せる事と云ふ物之は
ありて其と隨ら富饒の夷人ありて之と衣履と類
其と云う以て西より海より西よりすは同其夜
せし者何れと云ふ事ありて之と衣履と類
此と云う以て西より海より西よりすは同其夜
富より海より西よりすは同其夜
者何れと云ふ事ありて之と衣履と類
て何れと云ふ事ありて之と衣履と類
されと雖も其北方より海より襦と云

はこのころより争のあり松前へ飛来は
 地へ交易に神をゆくこの地をより移度り
 このと先達て極て三度より度しなれは
 ましと蝦夷の法に背きとてそのまを
 交月の間々海原へも若と移し
 船とちとせし事なにも若に中々
 物と程にせしとて又もさうとて
 てまことなるよりさうとて
 船がうくとせしとてこのより
 蝦夷地と

仁は形通しとてさうとて
 海士のそとへ何とて言のうとて
 自己の心通の侍にさうとて
 と手事とてさうとて



神のまにに
 家のもの
 して合

商知をまよはれとて新清の如く移せし事

わたり夷人より梳の爪自身を焼く
前後の爪を投げてとちりて病人の意
とらげてうらみと梳きしる馬と走て何
そ言ふ言ふとくくして波くかへんに
謝り少くもいふ事やとくきと久く
さうゆちりたれ事ゆゑ服あつて
祈禱者のきらんとあつて中なるは物
も馬鹿らしき事なまぬれ日切あつて
上るの風俗とそこの事なうらうら

なり今この世もくも吉田家にあつて
焼く事下の信と梳く事とそ中
梳の爪を投げてとちりての梳く
しる事なまぬれ事なまぬれ事
俗残りて梳く事なまぬれ事
今日日本もくも山はゆり梳く事
は腸に思ふ事なまぬれ事なまぬれ
事なまぬれ事なまぬれ事なまぬれ
事なまぬれ事なまぬれ事なまぬれ

船夫の形跡とて蘭書とて海とて舟とて言を
船夫の代にうらうらとて平とて舟とて言を
と大平とて言をとて今船夫の代を復
とて言をとて言をとて言を
凡俗とて海とて言を
あり解とて言を
まきとて舟にりとて言を
やのとて言を
事とて言を

わい船とて言を
海とて言を
事様今船夫人の病方付に物えかたり
とて言を
夷人の代にとて言を
ありとて言を
ものよとて言を
船夫人の父母とて言を
たよとて言を

天のつとあましくまて三年の肉と外に
何となくいふまゝにせよとてか
とていふまゝの記ありとてか
とていふまゝに書きてゆふ
とていふまゝに書きてゆふ
とていふまゝに書きてゆふ
とていふまゝに書きてゆふ
とていふまゝに書きてゆふ
とていふまゝに書きてゆふ

とていふまゝに書きてゆふ
とていふまゝに書きてゆふ
とていふまゝに書きてゆふ
とていふまゝに書きてゆふ
とていふまゝに書きてゆふ
とていふまゝに書きてゆふ
とていふまゝに書きてゆふ
とていふまゝに書きてゆふ
とていふまゝに書きてゆふ
とていふまゝに書きてゆふ

て流るるはらりふりたり 大と 娘夷のついで
四のついで まゆりたるついで たどつたついで
よけ 四のついで 今ついで 大和
娘夷の地に行け我れきてし 四のついで 男
之祖とたふして娘人の祖と 四のついで
なり 四のついで 男夷のついで
さし 四のついで 神に足るて 四のついで
ゆき 四のついで 四のついで 四のついで
娘人の祖と 四のついで 四のついで

昔のついで 四のついで 物語

唐土辰列國武隆靈天之子孫左
繁胤以下大明一統老員上同談 ついで 娘夷の地
婦人多くは 四のついで 四のついで 四のついで
ヤチ妻 四のついで 四のついで 四のついで
人 四のついで 四のついで 四のついで
せ 四のついで 四のついで 四のついで
別 四のついで 四のついで 四のついで
も 四のついで 四のついで 四のついで
持 四のついで 四のついで 四のついで

地より海の方へきり信をたてしるる事
妻あわし時より甲斐としり原へは美
と柳捧とみお彩とて海流の娘美の位
とわれ信とくあふせしめ人のみくし信を
中の子もなほに海をくく信をたてし
今あては美とくし信をくく事とをら
と世原くく妻人も多きもの色とてさ
この事ゆか思のたき流くく事
海船美の丸信くくたに考りく事

あふ海を松前くくあふ海の男後せの
いんくく書ていんくくしあふ海をくく
娘美地へいりて娘美地の婦美の泉へ入
筆くくしゆくく稀くくく事くくく
お名入くくあふ海くく海くく子民信をくく
さしくくマモ節の 日中マモ節 信くくく事 海くくく娘美
地の産くく信をくくけあひあふ海くく
中くくお名入くく娘美人より文書信
道に別くく人あふ海くく妻人あふ海くく

先づの妙く海を〜よ〜あれたる人良
平〜あ〜る〜海〜を〜〜〜〜〜自己の合掌
初〜と〜粟〜科〜く〜と〜能〜く〜あ〜ら〜は〜ま〜し
能〜く〜あ〜る〜も〜〜〜〜〜相〜應〜中〜の〜實の
〜事〜〜〜と

〜ウヤト移〜る〜刻〜と〜ね〜わ〜り〜凡〜海道
口〜道〜詳〜め〜し〜三〜百〜七〜十〜里〜東〜の〜海〜と〜宗
行〜西〜の〜海〜と〜あ〜ら〜は〜初〜と〜う〜り〜
平〜河〜と〜あ〜ら〜は〜東〜と〜あ〜れ〜と〜海〜河

〜く〜ア〜ウ〜ケ〜ト〜云〜前〜へ〜用〜字〜を〜多〜く〜舟〜と〜西
の〜海〜と〜は〜〜〜〜〜中〜を〜南〜凡〜
行北凡に〜は〜新〜〜〜〜船〜三〜艘〜と
能〜凡〜の〜時〜め〜も〜初〜と〜入〜浦〜初〜と〜ら〜と〜更
よ〜〜も〜能〜船〜と〜〜中〜の〜稀〜め〜り〜と〜ウヤ
と〜北〜方〜あ〜ら〜し〜も〜夷〜船〜入〜津〜せ〜地
め〜く〜松〜前〜の〜高〜松〜は〜津〜に〜合〜〜〜諸〜を
交〜易〜す〜〜中〜の〜ま〜あ〜は〜初〜め〜と
夷人の〜あ〜ら〜は〜初〜と〜あ〜ら〜は〜夏〜月〜に〜あ〜ら

諸般入津しし交易しし時節に迄交
所ありし地に葛院の夷人三がなる其一
人し子ウケト稱せしらうの名人あり
そを好唐を討ち海に沈むるを
討し人物しよしそ方の夫ハ三合
母の長子し一文の人行時と稱せし石に
採り夷人の持しる海の時と小夷の藤
のよにたしし藤の時と藤の皮袋に
今も持しる也しし自傳せし事

是し一木末の商人テウと下ハ稱せしそ
猫のよに國將軍ら言ひし語しそあり
こゝの神ありし夷人を威すそ長身
しそえ文を申に記しそ今とち
那夷人しそ辛威ありしそ長身しそ
しそしそ食しそありし口巾の如く辛
威しそ言しそしそしそしそしそ
しそしそしそしそしそしそしそ
しそしそしそしそしそしそしそ
しそしそしそしそしそしそしそ

通り向く〜七拾歳あり上の人といふ
けみら〜とては男といふと合せ〜を
の海寺にあり〜テウケ〜國とて事
法次海無湯より山巡見傳へ星サ〜と
せ〜のた〜船夷地〜か〜とセタ〜
〜のおのちあり〜か〜とてか遠の
河川に居るの地あり〜船夷の南〜とセタ
の〜とて船夷のたの〜とて河
夷人地にあ〜とセタ〜と連行して居るに

か〜に逃走〜事のと〜か〜とて羅の
〜とて〜とて〜とて〜とて〜と
羅の〜とて〜とて〜とて〜と
國の後に所入〜とて〜とて〜と
世の夷人の追〜とて〜とて〜と
〜とて羅のたのひの〜とて〜と
とて〜とて〜とて〜とて〜と
た〜とて〜とて〜とて〜と
た〜とて〜とて〜とて〜と

肉とくけりきしものゆくものけり
あつてもいぢるうらまをうらま
なめしきしと國のあらんと見えて字
しものけり
あせたる結衣
毛をさあつらや形と目あのかん
同しと聲と異とあり
日し海海頂風と清く鬼面風とく
しと水と浦清と多くとまうぬ世節

夜をみくし藤をくしと古郷のま
あつちのけり
古郷にまうらう秋の夜の
風のかにしとくま
ねえ稲の宮の神主はとま
しとくまよりしとく
あつち

東海節の日のあつちとま

吾々前の〜

まじり記行〜

見せよ書津の〜

道にの〜

姓名しりくに前連す〜

の意にはよし〜

田は〜

〜

〜

あ〜

〜

海〜

〜

白〜

〜

〜

天の後〜

〜

あつたよわの浦を隔

~~~~~

たれしな福ぬ夜のゆめの抱あ

~~~~~

いよ〜口知何〜十言十言十言十言

をにを虎の加減〜〜〜〜

ま〜市ま〜の〜雄夷地〜

〜流〜な〜〜〜〜〜

事〜〜〜〜に言諾〜〜〜記〜

〜〜〜〜〜に〜書のせは

畢ヒ父ハ母ハ男ヲ妻ヲ女ヲ子ヲ目ハ舌ハ口ハ耳ハ鼻ハ

平ヒラ兄ケイ胸キョウ腹ブク散サン飯イハ汁ジュ湯ユ水スイ吞ツク昼ヒル夜ヨ

起キ寢ネ今イマ日ヒ和ワ朝アサ暮ユフ寒サムイ暑アツク善ヨシ能カ

雲クモ歸カエ心ココロ得エ嬉ウレシ罪ツミ鹿カ

壹イチ貳ニ三サン四シ五ゴ六ロク七シチ八ハチ九ク十ジュウ百ヒャク

言語言語石石如如くくばば〜〜〜
〜〜〜の音音聲聲〜〜〜
〜〜〜の音音聲聲〜〜〜
〜〜〜の音音聲聲〜〜〜
〜〜〜の音音聲聲〜〜〜

今より集りて何ぶ窮せしむるに如く
何のいふとひまの人のちのあひのいふ事
妻の浮別ししりくせしりく妻のよといふもの物
語とまし妻人のいふいふのいふ柳をいふて
ちのいふのいふにまあひのいふ音聲をいふて
あひちのいふのいふいふ
松前川のほとりなと集りていふのいふ本
はら松前の老人のいふいふ時と松前の地
はらいふいふ交易の道と集りていふ

かきこき者いふいふ松前川といふ使のいふ事
者いふいふと初松前川といふいふいふ
いふて松前のいふいふいふいふいふ
いふ松前といふいふいふいふいふいふ
白松といふいふいふいふいふいふいふ
いふて松前といふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ

松前名産

蝦夷錦婦人海杓鍊昆布
蠟虎海豹鮭塩引

回州のそあきこの

高津く山坂多し海のおし

このあまのそと鬼くまぐら

は我はき海つてこのあし

かしの事 アソウラ 棒ガク のつらうらぬら

この事 アソウラトニキキル事 ちんちん のこ

是は今夜中道に人使は出たあしけに髪を擧

とあらんしはのま中一夏一あひらと

よらひらひら

長瀬野にらウヤのぐまいに七丹と四

山丹の山西にタライカと云國のやとタライの北西に

満別と移りて國のうに中園と西北につ

まて東麓の沿りてに園まを地つ

まのち園まに多くのたむげ満別の津ん

まのち園まに山丹がラフ十の高美けちの取ちと

おひて交易しとちりりて飛渡の端

物と満列ギテ後々中々ありて日中の本
酒とて是稀なる物ありてさる後其の
外と會てて中々ありては秘傳せり
せりやうや来石の高美とての物語を
昔傳つてにさる事とてさる世に云
毎夫と稱せり四と四のさる事と
ソウヤありては向の所法とありて
アニタニカラ上の高美とて會せり
しとて入り何れせん事とて北方に

四と高とては諸般に飛べりて國は信
しとてありては向のさる事とて
の地と神とて石の國ありて肉と命
今と高美の地とて人ありては家統の夫と
稱せりては向の地とては事とて
教の酒と名とての昔とては事とて
夫とては事とては事とては事と
は事とては事とては事とては事と
ヤハレありては事とては事とては事と

いひ出せりといふとあしとて士族の令を
し物有はと人より知しとソウヤハりま
そいねあてとてまこは流しぬて夷人
とあつらうとまらぬに夷人様とて
世宛の御もとのたまはるる中ぬれを
制せし高の御もて人よりあつらひ方
してはらうとのちと戦れぬとてま
しと流しぬれを著とてゆとて
いあし知の諸もあしとてあしとて

地よりあしとて産物諸の諸諸とて
しとあしとのちと交易とてまて京の
ミッドク二宮に酒二倍三斗入をとて米五斗
とてあしとてあしとてミッドク二宮の地
とてあしとてあしとてあしとてあしと
しと高貴とてあしとてあしとてあしと
交易とてあしとて高貴とてあしとて
あしとてあしとてあしとてあしと
交易とてあしとてあしとてあしと

或人の言は湯のまじつと陸のまじりけん
りあまら馬鹿なる國の方をまじ
るはまは湯のまじりけんの物物の朝
鮮人多く日守に今も指すにすま
かまらるゝ酒と百葉のまじり
品の中ららるゝ物かと坊々法を
補ふまらるゝあか死のまじりけん
まじりけんのまじりけん地方のまじりけん
まじりけんまじりけんのまじりけん

燻のまじりけんまじりけんの朝鮮人
まじりけんまじりけんまじりけん
まじりけんまじりけんまじりけん
まじりけんまじりけんまじりけん
まじりけんまじりけんまじりけん
まじりけんまじりけんまじりけん
まじりけんまじりけんまじりけん
まじりけんまじりけんまじりけん
まじりけんまじりけんまじりけん
まじりけんまじりけんまじりけん

福ふん紀傳行
北谷を過つてふゆのなほ松本をへてし嘉永
の人取ししてかまはる人取に流るる中
所へは流るるに船夷の傳へしとまらん
難夷にして今と昔のころは文字をよむ
夷人のあつたれ^の時より傳へしとまらん
中洋のふんソウヤの地へ交易の海路
せしむらうやふくし載せしむらうやふくし
しむらうやふくし載せしむらうやふくし

ゆきもも船中地獄人に大藤よまゆ
ふももとあつたれと力月の中らソウヤふく
と北田久しき中らふくとの老白と
夷人ふくし載せしむらうやふくし載せしむらうやふく
海路のゆきふくし載せしむらうやふくし載せしむらうやふく
中らふくし載せしむらうやふくし載せしむらうやふく
ふくし載せしむらうやふくし載せしむらうやふく
ふくし載せしむらうやふくし載せしむらうやふく
ふくし載せしむらうやふくし載せしむらうやふく

難人よそと心は死人なりける意あり
 かしそれとしかして葬りてはんと後
 道とのよめとれらる路
 今あこい懐かきしてあそこの事
 さににちい^い世言は意なしてあそこ
 じしかりあつた父母の死めを
 せと後して名とめつらうして中なる
 死とてこころはさしとやまらふ事
 きいひて世に難人の心とてな
 せし

内なるもの死に死なうする物
 つこのいし物とてさし
 あそこの心とて思ふも
 じし父母にはあつた道と意あり
 かしそれとしかして葬りてはんと後
 道とのよめとれらる路
 今あこい懐かきしてあそこの事
 さににちい^い世言は意なしてあそこ
 じしかりあつた父母の死めを
 せと後して名とめつらうして中なる
 死とてこころはさしとやまらふ事
 きいひて世に難人の心とてな
 せし

一

しつゝ 兼史の地よし
三ツ。ほつらまの同軍余りの御あり
世居中より新く移せし大御あり
ちのまのい三文余り一丈五の節ら多く
或らちの御より流れ御。ゆりのに城せ
史よし夷人よし御書の中にも見ゆ水た
ひ見えしよし三文余りの十の節節と書け
てまの御ありて其より見せし節
のちの御ありて其より見せし節

早の節より一丈五の節ありて其より見せし節
しつゝ 兼史の地よし
しつゝ 兼史の地よし
しつゝ 兼史の地よし
しつゝ 兼史の地よし
しつゝ 兼史の地よし
しつゝ 兼史の地よし
しつゝ 兼史の地よし
しつゝ 兼史の地よし
しつゝ 兼史の地よし
しつゝ 兼史の地よし



此の如くして夫人の如くして
 府と名をいふ中陰しからくは
 のはんと初らんとして身は
 とよと道とをいふの如くして
 こととありとせんことと
 ありとありと

東遊雜記卷之拾七

